博士学位請求論文本審査報告書

請求者氏名　水町誠司
学位種類　博士（文学）
論文題目　「黒社会」の巨頭杜月笙の総合的研究
―1920～50年代―

水町誠司氏は、愛知学院大学学部、大学院前期・後期博士課程を経て研究員となり、今回、博士学位申請論文を提出することになった。

現在、多くの歴史研究者が多角的視点から中国近現代史研究にアプローチしているが、本論文は主に中国の政治、経済中心の大都会上海に焦点を絞り、そこで大きな力量を発揮した「黒社会」（「裏社会」）の大頭目で、秘密結社青幇の巨頭であった杜月笙の動態の解明を目指している。そして、日本敗戦後までも視野に入れ、考察、分析し、歴史的に位置づけようとする野心作である。なお、青幇とは、紅幇と並び称される上海の巨大秘密結社である。日本では、青幇に関して酒井忠夫、渡辺惇、古厩忠夫などの研究があるが、杜月笙に焦点を絞ったものではない。

１）本論文構成

本論文は序章、第１章～第７章、終章、及び史料・参考文献で構成されている。なお、本論文は170ページ（400字詰め約610枚）である。構成は以下の通り。

序　章　先行研究とその動向、当時の上海の状況など
第１章　杜月笙と上海四・一二クーデター
第２章　杜月笙と祖廟―落成式を巡って―
第３章　杜月笙と高級社交クラブ恒社の実態
―人脈の形成―
第４章　杜月笙の慈善活動とその特色
―黄金栄、張嘯林らとの関係―
第５章　杜月笙の「表」と「裏」の経済活動
第６章　杜月笙及び「上海黒社会」と日中戦争
第７章　杜月笙と日中戦争後における動向
終　章
論文・史料・参考文献

２）各章の概要は以下の通り。

第1章では、蒋介石が発動した上海四・一二クーデターにより、第一次国共合作は崩壊したとする。この時、杜月笙が秘密結社の青幇を率いて多くの共産党員、労働者を惨殺した実態に迫る。

第2章は、杜月笙を一躍中国で有名にした祖廟落成式を論じる。黒社会の頭目、有名政治家、京劇俳優までも多数列席した。『申報』はもちろん、日本の新聞までも報道し、その影響力は大きかったとする。

第3章は、「黒社会」のみならず、表社会での名声と実力を一挙に高め、基盤を固める手段として、高級社交クラブ恒社を経営した。それを梃子に有力者や名士と交流し、人脈を築き、上海の政界、経済界に大きな影響力を有するようになったとする。

第4章は、杜月笙による慈善活動であり、無料病院、学校設立、孤児院に寄付、災害救援などを実施した。なお、これらの資金はバザー開催による募金もあるが、第5章にある「裏」資金も投入された。

第5章は、杜月笙の「表」と「裏」双方の経済活動を論じ、その実態と特色を導き出す。「表社会」では、自ら銀行を設立し、董事長に就任。他にも製粉、紡績、交通各公司の理事などに就任、利益を上げた。他方、「裏」ではアヘン売買、売春、賭博場の経営などで巨額の利益を上げたとする。こうした表裏一体の経済活動で租界を含め、上海全域に大きな影響力を持ったとする。

第6章は、杜月笙を含む上海三大頭目（他は黄金栄、張嘯林）のそれぞれの動向を比較検討しながら、重慶の蒋介石、汪精衛の南京傀儡政権、日本軍との関係を考察する。日中戦争、太平洋戦争と続く重要な時期であるが、果敢に実態解明に挑んだ。日本との取引きもしたが、三大頭目の中で最もナショナリストであり、抗日的スタンスをとっていた意義を評価する。

第7章は、日本敗戦後の国共内戦期、いわば杜月笙と黄金栄の晩年、影響力が喪失していく過程を論じる（張嘯林は暗殺され、この世にいない）。この時期の杜月笙の動向も興味深い。

終章は、本論の総括と展望である。

３）本論文の特色

①博士申請論文では、当時上海の有名新聞『申報』（当初、第三勢力・民主派の新聞であったが、杜月笙が乗っ取った）、それに『時報』の記事を多く収集し、分析した。また、日本外務省文書も使用しながら充実させた。史料不足を回憶録などで補った。

②1927年杜月笙は蒋介石の四・一二クーデタに加担し、共産党員や労働者を惨殺したことで有名だが、満洲事変、特に盧溝橋事件以降、日本の中国侵略、特に上海攻撃に不満を持ち、基本的に

抗日へと舵を切った。

③中国国民党、共産党、傀儡政権、日本軍それぞれの活動が渦巻く上海で、杜月笙がどのように行動したのかを明らかにする。その際、杜月笙はアヘン売買、売春、賭博を経営すると同時に、抗日支援、慈善運動にも尽力した。その相反するかに見える実態にアプローチした。さらに張嘯林暗殺事件、政財界人と交流する高級クラブ「恒社」などの実態解明を進めた。

④貧困で学校にも通えず、盗みなどで生計を立てていた杜月笙の子供時代から、激動の中国上海で、頭角を現わす 1920 年代、1930 年代、そして日中戦争期の抗日姿勢、さらには国共内戦期、死去するまでの晩年までをとりあげている。

４）本論文の評価

【評価点】

評価点は本論文の特色と重なる部分もあるが以下の通り。

①本論文は、日本では日中戦争史、上海史などで言及されることは多いが、小説、伝記、回憶録などを除けば、歴史研究では、杜月笙それ自体の専論は管見の限り極めて少ない。そうした研究状況の中で、杜月笙を真正面からとりあげた。こうした研究姿勢は高く評価できる。

②杜月笙の生まれた時から死去するまで彼の生涯全体を記述した。その波瀾万丈な生き方を日中戦争という激動期を含めて明らかにした。もちろん中国、香港、台湾などで小説や伝記として杜月笙の生涯をとりあげたものもあるが、物語、フィクションなどが多い。その点、本論文は歴史研究として実証的に論じている。

③杜月笙がアヘン売買、売春、賭博などで巨額の利益を得たが、同時にそれらを資金に慈善、災害救済、学校や病院の設立をおこなったことを立体的、構造的に追求しようとした点は興味深い。

④杜月笙と蒋介石の国民政府、汪精衛の南京傀儡政権、日本軍との構造的関係に、極力実証的に果敢に挑戦している。なお、従来のものは、蒋介石と杜月笙などの関係に重点を置いており、汪精衛の南京傀儡政権との関係はまだしも、日本軍との関係は不明点が多い。まだ不十分な点があるが、それに踏み込んだ。

【問題点】

①研究動向整理がまだ完全ではない。先行研究、及び史料、資料、回顧録などを正確に区別し、分類する必要がある。そうすることで、本論文の意図、オリジナリティ、論理展開をさらに明確にできる。

②背景としての上海史、香港史を押さえた上で、当時の両都市

の状況とその推移について、より深く解明し記述すれば、杜月笙の位置づけがさらに明確になるのではないか。

③慈善運動などを「義侠心」、「地位と名声」を得るためと結論づけるが、より深い構造的分析と意義、限界の解明が必要だったのではないか。

④国際情勢、コロナ下で難しいとは思うが、上海図書館の再訪はもちろん、上海档案館や台湾の党史委員会所蔵の史料なども調査、収集し、使用すれば、さらに充実したものになるであろう。現在の政治状況から難しいが香港大学所蔵史料はどうか。また、『申報』『時報』などを徹底的に使用していることは高く評価するが、さらに多角的、かつ構造的に本論文を充実させるため『新聞報』なども探し、使用することが望まれる。

⑤日本軍と杜月笙との具体的関係の追究がまだ十分ではない。これは水町氏だけの責任ではなく、従来の研究状況が進んでいないこともあるのだが、防衛省戦史資料室で史料を探す必要がある。また、当時の外務省記録、外事警察史料もさらに徹底的に調査収集する必要がある。

⑥1927年上海四・一二クーデター以前の杜月笙と中国共産党の関係、及び国共内戦期、人民共和国の成立前後も毛沢東・共産党との関係があったが、従来の研究でも十分に解明されていない。確かに史料入手が困難な面もあるが、国共内戦で国民党を打倒した中国共産党と杜月笙との関係をさらに探究する必要があろう。

その他、一部に誤訳、誤字、ケアレスミスがある。注意されたい。例えば、「蔣介石」と「蒋介石」など「蔣」の字が不統一。また、宋子文が「宗子文」となっているなど。

以上の課題も指摘できるが、全体的に評価は高く、構想力、論理展開、実証各側面で一定水準に達していると認定した。なお、水町氏は学問、研究に真摯に向きあおうとする姿勢がある。地道かつ着実な研究を進め、東京の東洋文庫はもちろん、上海図書館などで史料収集をおこなっていることも評価した。水町氏は専門書出版を目指しているが、論理展開、史料収集、分析は今後、さらに強化する必要がある。そうすれば、歴史学界の発展に寄与することも不可能ではない。

５）語学試験、及び既発表論文など

①博士候補者試験の第一外国語の英語、第二外国語の中国語は共に合格している。

②博士論文審査規定では論文計3本で、内1本が査読付きであ

るが、水町氏の場合、すでに論文が計5本あり、内2本が査読付きである。他に研究ノート2本、書評1本がある。学会・研究会にも積極的に参加し、全国・東海地区報告も5回ある。本論文は、これら学術論文、学会・研究会報告などを基に、さらに考察、加筆・削除、修正、分析を加え、作成したものである。

なお、水町氏は博士前後期課程在学中、及び研究員時期、学会、各研究会の会員となり、積極的に発表・報告をおこなった。その時の批判、評価を前向きに捉え、推敲の上、論文を書き上げた。こうした粘り強い姿勢は、高く評価できる。このことを付け加えておきたい。

６）口述試験と試験結果

①口述試験

口述試験は、令和3年10月27日午後3時半から5時半までの2時間実施された。審査員は主査菊池一隆、副査松下憲一、小林隆夫、馬場毅（外部）の計4人である。各審査員に質疑に対して、水町は論理展開、実証、史料などに関して、真剣に説明、回答した。本論文を内容、実証、史料的に強化し、専門書の出版を目指すという。

②口述試験後、審査員4人で討論した。その結果、水町氏の学位請求論文は、審査員一同、愛知学院大学文学研究科の博士（文学）を授与することに相応しいと認定し、合格と判定した。

令和3年11月24日

審査委員

主査　愛知学院大学客員教授　菊池一隆

副査　愛知学院大学教授　松下憲一

副査　愛知学院大学教授　小林隆夫

副査　愛知大学名誉教授　馬場毅